

コラム③ アレルギー性鼻炎の発見、治療のススメ ～「気管支喘息」との関係を中心に

コラム②では、少し怖いお話をしてしまいました。

でも、子供の「かくれ鼻づまり」の発見、治療が大事なことが十分わかっていただけだと思います。

今回は、「かくれ鼻づまり」の原因として最も多い、「アレルギー性鼻炎」のお話しをしたいと思います。

アレルギー性鼻炎を放置すると、「かくれ鼻づまり」以外にも、子供さんに様々な悪影響をもたらす可能性があるのです。

アレルギー性鼻炎の有病率は現在40%ほどといわれ、年々増加傾向をたどっており、**国民のおよそ5人に2人がかかっている、もはや「国民病」となっています。**

…と、このような内容はどこでも書いてあると思いますので、病気の説明はここまでとしますね。

前回コラム②でお話しした通り、子供は「ホコリやダニ」が原因となった、「**通年性（＝1年じゅう症状がある）のアレルギー性鼻炎**」が多いです。

「**ものごごろついた時からアレルギー性鼻炎**」のパターンが多く、子供さん、なかなか自分で鼻の症状を言ってくれないことが多いのです。

それでも、子供さんのアレルギー性鼻炎をできるだけ早く発見して、治療しなければなりません。

私はそう思っています。

その理由を、これからお話ししますね。

●理由その1 アレルギー性鼻炎は、「自然に治らないことが多い」から

「エッ！？うちの子、病院でもらったアレルギー性鼻炎の薬を飲んで、今は治っているのだけど…」

残念ながら、それは「アレルギー性鼻炎の症状が、薬でおさえられている」だけであり、「治った」わけではない可能性が高いのです。
薬をやめてしまうと、いずれ症状は再発します。

薬は出来るだけ、続けましょう！

調査によると、アレルギー性鼻炎を放置、あるいは通常の薬剤治療のみを行った場合の自然治癒率（＝自然に改善する割合）は、成人で4割、小児は何と、たった「2割」なのです。

一般的な抗アレルギー薬や手術は、あくまで「対症療法」に分類されます。

「アレルギー性鼻炎は、自然に治らないことが多い」のです。

●理由その2 「アレルギーマーチ」を防ぐため

「アレルギーマーチ」とは、アレルギー体質があると、成長とともに次々とアレルギーの症状が出現してくるということです。



気管支喘息患者の80%にアレルギー性鼻炎を合併し、さらには食物アレルギー患者の42%、気管支喘息患者の70%にアレルギー性鼻炎が先行するという調査結果もあります。

アレルギー性鼻炎の治療をしっかり行えば、「アレルギーマーチを断つ」ことが出来る可能性があります。

●理由その3 「気管支喘息」をコントロールするため

これは意外と知られておらず、私が「ジレットイ！！」と思っている理由です。

現在、「気管支喘息」の診断で小児科に定期的に通院されている子供さんも多いのではないかと思います。

「理由その2」でも触れましたが、気管支喘息患者の80%にアレルギー性鼻炎を合併します。

私は個人的に、「ほぼ100%」と思っています。

理由は簡単で、「**同じアレルギーのタイプ**」だから合併しやすいのです。

喘息は、子供の咳が続けば親御さんをはじめ周囲の人は症状に気づきますし、時として命にかかわることもありますので、必ず小児科を受診させます。

しかし、**「アレルギー性鼻炎のコントロールをうまく行えば、喘息のコントロールがつきやすくなる」**という事実は、医療関係者を含め、意外と知られておりません。

コラム①でお話しした通り、アレルギー性鼻炎で鼻がつまると、**口呼吸や後鼻漏で咳が悪化し**、また鼻で産生された**「アレルギー反応物質」が血流にのり、肺に達することでも喘息発作が引き起こされやすくなる**と言われていています。

「One airway, one disease」という言葉があります。

「一つの気道、一つの病気」という意味です。

アレルギー性鼻炎と気管支喘息を、**「一つの気道の病気」**として同時に治療を行うという概念です。

残念ながら日本では、**アレルギー性鼻炎は耳鼻いんこう科が専門、気管支喘息は小児科が専門**となり、私自身も喘息の専門家ではありません。

「気管支喘息」で小児科で治療中の子供さんが、合併するアレルギー性鼻炎については未治療、あるいは継続して治療が行われていないケースをよく経験します。

喘息で通院中、子供の鼻の調子が悪いと小児科で一時的に鼻炎の処方がおこなわれ、症状が改善するとその治療が中止されることが多いのです。

「喘息のコントロールのために、耳鼻いんこう科で鼻のチェックをすすめる」小児科の先生は、残念ながら少数ではないかと思います。

今まで私のコラムを通してお読みいただいていた方は、「これではダメ」ということは、すでにお分かりかと思います。

アレルギー性鼻炎では、子供さんが、親御さんがみてわかるほどに鼻の調子の悪いときは、「ものすごく鼻の調子が悪い」状態であり、一見調子が良いときでも、「少し鼻の調子が悪い」状態なのです。

この、「少し鼻の調子が悪いとき」に、調子が良くなったとしてアレルギー性鼻炎の治療が中断されてしまうのです。

近年小児科側より、やっと前述の、「アレルギー性鼻炎のコントロールをうまく行えば、喘息のコントロールが付きやすくなる」という内容の学会発表が、少しずつ出るようになりました。耳鼻いんこう科側だけでなく、小児科側にもこの概念が広くいきわたるよう、期待しています。

今回はここまで。

次回は、「舌下免疫療法について」です。

アレルギー性鼻炎を「根治」させる可能性があり、私が特に力を入れている治療のお話です。